



鈴鹿市考古博物館 特別展示室での展示の様子。

今年度の特別展は、新元号「令和」の典拠とされる万葉集にちなみ、「信綱と万葉集」と題して、令和2年(2020)1月16日から2月24日にかけて開催されました。令和元年(2019)9月初旬の大雨による被害のため、佐佐木信綱記念館の資料館展示室が使用できなくなつたことから、鈴鹿市考古博物館の特別展示室を会場としました。

万葉集は原本が現存しておらず、館の特別展示室を会場としました。

万葉集は原本が現存しておらず、万葉集古写本の複製。手前から2点は信綱が複製した『有栖川王府本元暦校本』、『西本願寺本』。最奥は信綱が解説を寄稿した『紀州本』。

万葉集は原本が現存しておらず、多くの歌人や国文学者に用いられた編著を手がけました。万葉集の英語訳事業に委員として参加するなど、國外への普及も夢見ていました。

展示は三章で構成し、第一章「万葉集研究に至るまで」では、弘綱の教育、東京大学への入学、和歌革新運動を経て

万葉集は原本が現存しておらず、多くの古写本によって、伝世されてきました。信綱の万葉集研究では失われた原本の再現である「定本」の作成を主な目的とし、そのための基礎的な資料となる古写本を捜索しました。国語学者・橋本進吉や国文学者・武田祐吉など、他の学者との共同研究も積極的に主導し、古写本間の文や訓の相違を一覧できるようにした『校本万葉集』は、その代表的な成果といえます。

また、普及活動にも力を入れ、日本歌学全書版万葉集や『新訓万葉集』



右から万葉集の中国語訳、ドイツ語訳、ロシア語訳に関する資料。信綱はそれぞれの翻訳者と親しく交流していました。



万葉集古写本の複製。手前から2点は信綱が複製した『有栖川王府本元暦校本』、『西本願寺本』。最奥は信綱が解説を寄稿した『紀州本』。



■図録の配布について  
展示資料を掲載した図録を、佐佐木信綱記念館にて配布しています。残部は令和2年1月21日現在、二六〇部となっています。お求めの方は、ぜひご来館ください。

## 佐佐木信綱

記念館だより 第34号

■展示の概要

佐佐木信綱(一八七二~一九六三)は、歌人である一方、日本の文学を研究する国文学者でもありました。現存する日本最古の歌集である万葉集は、信綱にとって生涯を通じた研究テーマでした。

万葉集は原本が現存しておらず、多くの古写本によって、伝世されてきました。信綱の万葉集研究では失われた原本の再現である「定本」の作成を主な目的とし、そのための基礎的な資料となる古写本を捜索しました。国語学者・橋本進吉や国文学者・武田祐吉など、他の学者との共同研究も積極的に主導し、古写本間の文や訓の相違を一覧できるようにした『校本万葉集』は、その代表的な成果といえます。

また、普及活動にも力を入れ、日本歌学全書版万葉集や『新訓万葉集』

父・弘綱の遺志を継ぐ形で歌人・国文学者としての「道」を邁進したかに見える信綱ですが、晩年の自伝『作歌八十二年』(一九五九、朝日新聞社)などからは、歌の道へ進むうえでの信綱の挫折や屈折も窺えます。

東京大学古典講習科への入学後、信綱は明治十九年(一八八六)から、国民英学会にて英語を学び、さらに官立東京英語学校の夜間部にも通っていました。大学卒業後には、東京大学(当時は帝國大学)への再入学を希望し、入試に必須であった英語の習得に意欲を示していました。

ところが信綱は、近眼のため六、七年をかけた勉強は難しい、と眼科医から診断を受けます。绝望して弘綱に話したところ、「それならば、自分の常にいう民間にあつて歌道の弘布と、歌学の研究につとめるがよい」と励まされ、自ら「道」を進む決意をしたといいます。民間での活動に対する信綱のこだわりは、一度大きな挫折を経て選択されたものだったともできます。

また、信綱が学生だった明治十年代

の時代でした。晩年の隨想集『万葉集の心』(一九五六、明治書院)によると、「古典学研究を志した者は、泣いて勉励を誓った」とあります。のちに信綱は、欧化主義の反動として台頭した国粹主義の機運のもと、『日本歌学全書』を編纂することになります。

一方で信綱は、「御雇外国人」として日本の国文学の黎明期に関わったバジル・ホール・チエンバレンから大いに影響を受け、チエンバレンを、弘綱と木村正辞に並ぶ「三恩人」のひとりとして称されています。「心の花」では外来語を取り入れた作歌を勧めるなど、信綱には、伝統の尊重だけではない、革新的な側面がありました。

信綱自身は、その要因を弘綱の態度に見出しています。加えて、万葉集など古代の和歌の特徴として、漢文学や仏教などの外来文化への「同化」を挙げ、

欧化の進んだ明治時代を、万葉集が編纂された奈良時代の反復として捉える見解を示してもいます。信綱の「伝統」と「革新」の両面は、外来文化との同化によって発展した和歌の伝統そのものに根ざしていたともいえるでしょう。

### 学芸員の気まぐれコラム

後半は、鹿鳴館に象徴される欧化主義の時代でした。晩年の隨想集『万葉集の心』(一九五六、明治書院)によると、「古典学研究を志した者は、泣いて勉励を誓った」とあります。のちに信綱は、欧化主義の反動として台頭した国粹主義の機運のもと、『日本歌学全書』

### ご利用案内

三重県鈴鹿市石薬師町に拠点を構える佐佐木信綱記念館は、明治・大正・昭和の時代を生きた歌人・国文学者である佐佐木信綱(1872~1963)の遺功を称えるべく、昭和45年(1970)に鈴鹿市が設置した展示施設です。もとは「信綱生家」を拠点として開館しましたが、昭和61年(1986)に「信綱資料館」が併設されて以降は、こちらを中心に展示活動が行われてきました。資料館と生家の隣には、佐々木家がかつて書庫として使用した「土蔵」や、信綱が還暦を自祝して寄贈した「石薬師文庫閲覧所」なども残されており、これらを一体として佐佐木信綱記念館と称しています。かつての愛用品や、少年期の短冊、ペンネームの由来である名刺、唱歌「夏は来ぬ」の歌詞がしたためられた色紙など、数々の収蔵品を常時展示するほか、毎年秋頃には特別展も開催し、市内外への魅力発信に努めています。

### 佐佐木信綱記念館

鈴鹿市石薬師町1707-3 TEL&FAX 059-374-3140

開館時間 9:00~16:30

休館日 毎週月曜、第3火曜(休日の場合は開館、翌日休館)  
年末年始

アクセス 近鉄鈴鹿市駅からC-バス乗車  
佐佐木信綱記念館下車徒歩2分  
東名阪自動車道  
鈴鹿ICから車で約20分



資料館

令和2年3月現在、資料館工事中のため、信綱生家において、常設展に代わる展示を行っています。

発行

鈴鹿市文化スポーツ部 文化財課(鈴鹿市神戸一丁目18-18)

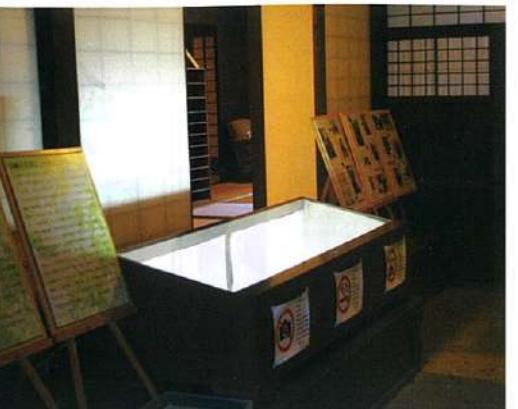
TEL 059-382-9031 FAX 059-382-9071 HP 鈴鹿市文化財ガイド <http://suzuka-bunka.jp/>



## 臨時常設展報告

佐佐木信綱記念館だより

第34号 令和2年3月10日



生家主屋における臨時常設展の様子。

令和元年九月五日から六日未明にかけての豪雨被害により、佐佐木信綱記念館の資料館展示室が使用できなくなつたため、十一月一日から信綱生家主屋に臨時の常設展を設置しました。信綱の生涯を石薬師・松坂在住の時代と東京・熱海在住の時代に分けて解説したパネル二点、信綱の生涯を図解したパネル三点のほか、主要資料を紹介しています。資料館展示室の改修が完了するまで展示する予定です。

また、信綱の妻・雪子の鏡台や、信綱が熱海在住当時に使用していた肘かけ椅子などもご覧いただけます。

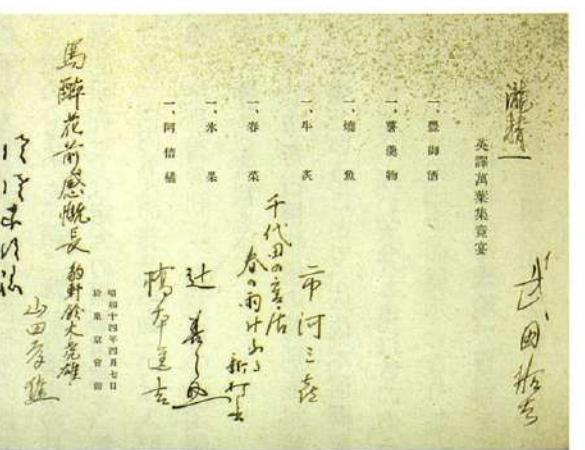
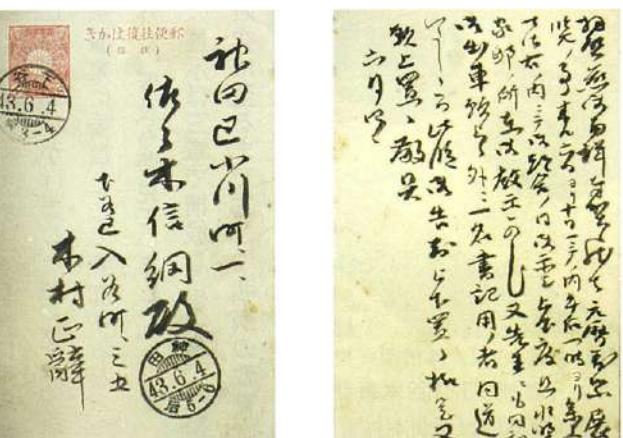


## 収蔵庫より——特別展関連

今年度の特別展に関連して、記念館で所蔵する資料をご紹介します。

## ■国学者・木村正辞からの書簡

明治四十三年六月四日のもの。木村正辞は、明治時代以降の万葉集研究の先駆けであり、東京大学では教員として、信綱を万葉集の文献研究へ導きました。万葉集の古写本である「元暦校本万葉集」を信綱と閲覧するため、信綱の都合や所有者である水野家の所在を尋ねています。



## ■英訳万葉集出版記念会献立表

昭和十四年四月七日、万葉集の英語訳の出版を祝して開催された祝賀会の献立表。「豊御酒(ワイン)」、「薯蕷物(ポタージュ)」、「牛炙(ステーキ)」、「春菜(ムニエル)」、「水菓(アイスクリーム)」、「阿ダ」、「焼魚(ムニエル)」、「アラビック」、「オレンジ」が列記されています。

周辺には、向かって右から武田祐吉、美術史家の瀧精一、イギリス文学者の市河三喜、言語学者の新村出、歴史学者の鈴辻善之助、橋本進吉、中国文学者の鈴木虎雄、国文学者の山田孝雄、信綱の順に、編纂委員のサイン等が書き込まれています。

佐佐木信綱記念館だより

第34号 令和2年3月10日

首  
綱  
34万葉の言葉の花々海の外の  
文の林に匂ふ日ありこそ

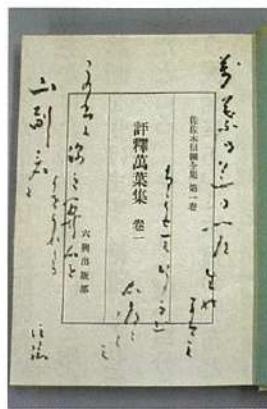
## 寄贈資料紹介

今年度もご厚意により三件のご寄贈

を賜りました。

## ■『評釈万葉集』巻一~三

三重県個人寄贈



## 信綱詠歌 三重県個人寄贈



## 信綱歌碑除幕式関係写真

三重県個人寄贈

信綱の歌碑建立に関する写真二十

六点。歌碑は、昭和三十七年(一九六二)

十一月、三重県三重郡菰野町湯の山

温泉のいざない橋付近に建てられたも

ので、「白雲は空に浮かべり谷川の石

みな石のおづからなる」の歌が刻

まれています。歌を刻む前の、切り出

されたばかりの岩や、昭和三十八年

(一九六三)春の除幕式の様子を写した

もの、信綱の秘書を務めた村田邦夫

や、熱海の凌寒荘で撮影された最晩

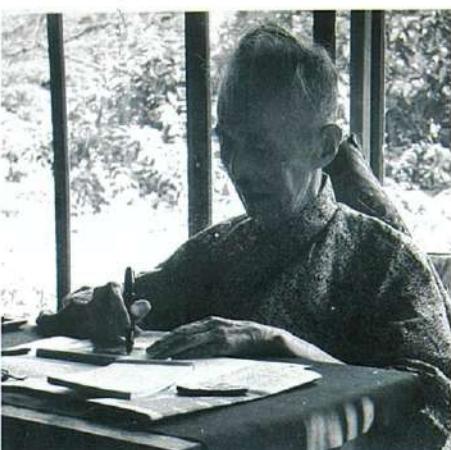
年の信綱の写真も含まれています。

信綱は、当時の菰野町長との間に

意見の相違があり、建立事業から退

いていましたが、信綱の教え子・熊澤

照子たちの尽力で建立に至りました。



『評釈万葉集』は昭和二十三年(一九四八)から同二十九年(一九五四)にかけて、佐佐木信綱全集第一巻から第七巻として六興出版社から刊行されました。

寄贈された巻一は、「評釈万葉集」編纂に出資した山副博士に献本したものと思われ、扉には「万葉の道の一道生のさきはみ踏みもてゆかむこころつしみ」の歌が信綱の筆跡で記されています。

信綱の詠歌が記された短冊。時期は不明。歌意は、「歌の道」という筋の道を父の教えを守つて幾十年も歩んできた」というもの。

信綱は、「いつの日に行きつくべしやそは知らずただに私は行く」筋の道を「や」道の上に残らむ跡はありもあらずもわれ虔みてわが道ゆかむ」など、「道」についての歌を数多く読んでいます。それらの歌からは、信綱が自らの道を、長く孤独で、成果の如何にかかわらず、迷わず進むべきものと見なしていたことがわかります。

太平洋戦争敗戦直後に出版された歌集「黎明」(一九四五、八雲書店)に収録。大正十三年(一九二四)に信綱は、中国、インドシナ、ベルギー、ドイツ、フランス、オランダ、ハンガリー、イギリス、アメリカの大学及び図書館に、完成したばかりの「校本万葉集」を、英語による解説を添えて寄贈しましたが、その当時を回想して詠まれたものと思われます。